

低地上に堂宇がある。関東の三大不動とは高山不動（飯能市）、大山不動（伊勢原市）と成田不動をいうようだが、前二者は室町時代で少し時代が降る。不動信仰は修験道と結びついて、滝の位置にも関連する。

目黒不動、高幡不動、成田不動は平地にあって平安時代前期に成立しており、東国を鎮撫する日

的でその據点につくられたとってよかるう。いずれも南関東に偏してあり、緯度的にはほぼ並んである。創立年代の微妙な差の順に北ほど新しくなることにも注意しておきたい。（参考文献 新勝寺・密教学会編：総覧不動明王 323P.,1984）

1990年1月28日

浅海先生との14年

井内 昇

お茶大地理学科の一員になって14年余、自然地理学専攻の先生とは学問上、或いは講義に関しての接触は少なかったが、同じ教室の一員とあればこの14年間の思い出は決して少なくない。前後の脈絡なしに思い出すことを二・三綴ってみよう。

お茶大へ移ることがきまった1975年7月某日、当時地理学科主任だった先生は、私の勤務先の上司のところに割愛の挨拶に来てくださった。割愛の申し入れ、それも年度途中での申し入れとあっては先生にとって気の進まぬ訪問であったろう。少し固くなっておられ、「今とられるのは困りますなあ、誰か代りの人を見つけて頂けませんか…」という局長の軽口に変容縮され、「そう云われてもどうも…」とかなんとかすこぶる真面目に返答しておられたのを、昨日のこのように思い出す。

お茶大に来てすぐの秋休みに、浅海・斎藤両先生指導の3年生戸隠巡検があった。これ幸いと参加方を申し出たところ、快くOKして下さった。

さて、巡検初日の午後1時に集合場所へ行くと、学生と覚しき巡検スタイルの面々が20人ほどすでに集まっているが、肝腎の両先生の姿が見えない。案内の役場の人マイクロバスで先刻到着済み。時間はどんどん過ぎてゆき、役場の人怪訝な面持である。私はまだ学生とは面識がなく、学生たちも妙なジャンパー姿の男が居る、とチラチラこちらを眺めている。1時間程して先生から電話連絡が入った。何と、東京からの途中関越自動車道でジープが故障しこれから別の車を手配して行くので、先に役場の人にフィールドを案内し

てもらってくれ、とのこと。となれば着任直後でオブザーバーとはいえ、教室の一員である以上やむをえない。役場の人に挨拶し学生のあとからマイクロバスに乗りこみ、夕方まで鬼無里村を回った。生まれてはじめて女子学生20人とのドライブを経験。夕方両先生が到着したらドッと疲れが出た。

地味な土壤地理学ご専攻からも想像されるように、先生は学究、それも戦前タイプの学究とお見受けする。先生のゼミには数は多くないがコツコツ型の自然地理学希望の学生が集まり、先生の研究室に続く土壤分析室では何時も実験に励む学生の姿がみられた。他学科の或る先生が、数年前の退官時の挨拶で、「お茶大での生活には満足しているが、唯一の心残りは弟子が1人も育たなかったことだ」と述べているが、浅海先生のゼミからは何人かの弟子が研究者としての道を歩みはじめている。この研究志向は勿論大学人の第一の要件であるが、戦前はいざ知らず、戦後の管理社会では大学もまたその中に組み込まれ、教官も研究と教育だけしていればよいというわけにはいかず、教室内外の役職も引受けねばならぬのはやむを得ない。1975年4月に浅井主任が高校長になられたため、浅海先生に学科主任のお鉢がまわってきた。その時の先生の心境の一端が、「お茶の水地理」第17号(1976年)の先生の次のエッセイの一節に滲み出ている。「…おおよそ政治的なことが嫌いでも不得手、人を使うことも全く性に合わない者が長と名のつく役目をつとめることはいかに大儀なものか、性に合った人には判ってもらえないだろう

云々…」しかし、これを書かれた先生は、私が着任してからの14年間の半分以上主任をつとめられた。回り合わせとはいえ、浅井、式向先生はとも角、あとから来た私まで教室外の仕事を引き受けさせられ、結果的に先生の負担を重くしたことを申し訳なく思っている。

仕事に関しては謹厳な先生も、仕事外ではユーモアに富み、庶民的な面をお持ちである。私がこ

れまでにたった一回だけ経験したカラオケバーは先生のお誘いによるものであったし、話の途中によく軽いジョークをはさまれた。某週刊誌上で先生の2人のご息のお嫁さんが証言しているように、イタズラ精神も旺盛である。前号の1年生巡検報告で、先生の健脚は今も衰えていないことが明らかであり、これからも若々しい思考と共にますますお元気で活躍して頂きたいと思っている。

イギリスの地理教育

内 藤 博 夫

地理教育の問題は1988年度に続いて1989年度も談話会のテーマとなった。大学で仕事をしていると、自分が行っている講義や演習の改善については考えることがあっても、中学・高校における地理教育についてはうとくになりがちである（良くないことと反省している）。たまたま談話会でこの問題についての討議に参加できたことは、私にとっても有益であった。その際思い起したことは、ロンドン大学に滞在していたときに訪問したイートン校とその地理教育だった。イートン校といえば、イギリスのパブリック・スクール（私立学校）の中でも名門の誉れ高い学校である。パブリック・スクールについては池田潔氏の名著『自由と規律』（岩波新書）にくわしい。その中では「ウォータールーの戦勝はイートン校の校庭において獲得された」というウェリントン将軍の言葉が引用されている。イートン校に代表されるパブリック・スクールのすぐれた教育内容を強調した文章である。1961年6月、東大の山口岳志先生から手紙をいただいた。イートン校にC.J.O.クックという地理の先生がいるから訪ねてみてはどうかというものだった。良い機会だと思ったので山口先生のお勧めに従い、当時同じロンドン大学に滞在していた中央大学の青野寿彦氏にも声をかけ、1961年6月27日、2人でクック先生をお訪ねした。イートン校はロンドン西郊の町、ウインザーにある。鉄道の駅を降り、丘の上に立つウインザー城を背にしてテムズ川にかかる橋を渡るとほど近い所にイートン校がある。1440年創立という歴史

にふさわしく、構内の建物の多くは伝統を感じさせる威厳にみちたものだった。現在生徒は1200名以上、専任教員は125名ということだった。就学年齢は13～18歳、つまり日本でいえば中学・高校を一つにしたような制度になっている。全寮制で、女子は入学を禁じられてはいないが結果的に男子のみになっているとの説明だった。クック先生は寮の一つのハウス・マスターを兼ねており、その寮の中に住宅が与えられていた。構内を案内していただくとともに、日英の地理教育について意見をかわすことができた。

クック先生の地理教育に対する考え方は、慶応大学留学の成果の一部をまとめた論文「地理教育の役割——日本とイギリスの比較分析——」（地理、27巻2号、1982年）の中に示されている。この論文で注目される点は、イギリスでは生徒に事実を詰め込むのではなく、それを理解させることにつとめているということである。そのためにはゲームやシミュレーションという方法もしばしばとり入れられているという。こうした指摘には、日本の地理教育は知識偏重になっているのではないかという批判が含まれている。イートン校では地理の教材や生徒のレポートを見せてもらったが（残念ながらその日は地理の授業はなかったため、参観することはできなかった）、レポートは単に文献を読んでそれを整理したものではなく、生徒が自分で行なった調査記録が多かった。日本では文部省が定める学習指導要領があり、教師はそれに沿って教育しなければならないという制約